



介護等体験と心のバリアフリー

松原 豊

附属桐が丘養護学校教諭

はじめに

「五体不満足」が驚異的なベストセラーになり、そのブームにあやかっただけで、書店には障害をテーマにした本が多く見られるようになった。またテレビ、雑誌などのメディアにはバリアフリー、ノーマライゼーションなどの言葉が当たり前のように使われている。確かにここ何年かの間に、交通機関や公共施設等がバリアフリーの発想で改善され、障害のある人達が社会に出て行きやすい環境が作られてきている。その一方で、障害のある人達からは、バリアフリーは定着したが、最近では言葉だけで済ませてしまうことが日につくという意見も耳にする。つまり障害のある人のバリアのうち、階段や段差などの物理的なバリアや情報のバリアに関しては解消されつつあるが、心のバリアフリーは、本音と建前のずれがあり、それほど進んでいないのが現状のようである。

理解よりも触れ合いを

数年前にNHK教育テレビの特集でノーマライゼーションへの道という番組があった。その中で、現代の学生気質と障害者に対する態度に関して興味あるアンケート結果があった。現代の学生気質として特徴的だった点は、いわゆるノリの合わない人とはつきあいたくないと考えている者が全体の7割あり、能力社会を肯定しているものは8割近くいたことである。そして、仲間内のノリを大切にして、能力社会を肯定する学生ほど障害のある人に対する態度が冷たい、あるいはとまどいが見られることが調査の結果として示されていた。また、障害のある人と触れ合った経験のある学生の方が、経験のない学生に比べて、介助をやアプローチをすることに抵抗が無いことも示されていた。例えば、駅の階段の下で困っている車椅子の人を見たらどうしますか？の質問には表1のような結果が得

られた。

表1 困っている車椅子の人を見たらどうしますか。障害のある人とのつき合いが豊富な学生とつき合いのない学生との比較

つきあい豊富	通り過ぎる	18.4 %
	運び上げる	44.1 %
つきあいなし	通り過ぎる	33.8 %
	運び上げる	23.4 %

このように、心のバリアーを取り除くためには、障害のある人達との普段のつきあいや出会いがいかに大切かがよく分かる。

教師を目指す人のための介護等体験

「小学校及び中学校の教諭の普通免許状授与に係る教育職員免許法の特例等に関する法律」(介護等体験特例法)が1998年度から施行され、小、中学校の教員を目指す学生は盲・ろう・養護学校及び社会福祉施設において、7日間の介護等体験を実施することになった。この法律の提案理由をみると、「高齢化、少子化の時代に、将来を見据えた教員の資質向上の一環として、また、長い目で見て日本人の心に優しさを甦らせることに繋がるものとして、いじめの問題など困難な問題を抱える教育の現場で、これから活躍される方々が、高齢者や障害者に対する介護等の体験を自ら原体験として持ち、

また、そうした体験を教育の現場に活かしていくことによって、人の心の痛みがわかる人づくり、各人の価値観の相違を認められる心を持った人づくりの実現に資することを期待する」ことが述べられている。筑波大学では昨年度から、多くの教職を希望する学生が、茨城県内の福祉施設や附属特殊教育学校等において介護等体験を実施している。筆者の勤務する附属桐が丘養護学校では49名の筑波大生が学校行事や授業参加などの体験を行った。

介護等体験後、全員にアンケートを実施した。その中で、介護等体験が有意義であったかどうかの質問に対しては、全員が「はい」あるいは、「どちらかといえば「はい」」を選択していた。2つの解答の中では「はい」の方が多かった。また、記述式の感想においてもポジティブな意見が多く見られた。有意義であった具体的な点については、次のような事柄が多く上げられていた。

①障害の理解に関しては

- ア. 障害のある子どもたちに接することや介助することを通して、子どもたち自身や障害について実際に理解できた。
- イ. 障害の子どもに対する接し方がわかり、柔軟な対応ができるようになった。

②心理的なバリアに関しては

ウ、障害のある子どもに対する意識が変わった。

エ、障害のある子どもへの偏見が少なくなった。

③肢体不自由教育に実際に触れたことに関しては

オ、障害のある子どもたちとの触れ合いの大切さを感じた。

カ、個に応じた教育の大切さに気づいた。

等の意見が見られた。感想文の一例を下記に示した。

「実際に養護学校の中に入って、初めて、養護学校での教育の仕方を知ることができた。本当にいろんな障害を持った子どもたちがいて、みんなが自分にできることを精一杯やっている姿がとても印象的だった。みんな笑顔で活動している姿は“障害者はかわいそう”みたいな同情の気持ちを消し去ってしまう感じがした。先生方や家族の対応の仕方がとても暖かいものであったのにも感動した。あまり障害者の人と触れる、交流する機会はなかったけれど、それでも学校の中でいっしょに活動した時間は私にいろいろなことを教えてくれた気がするので有意義だったと思う。」

(人文学類2年女子 体験内容;入院部体

育大会の競技補助)

また、宿泊を伴うキャンプに参加した介護等体験学生の感想では、2名とも体験が有意義であったと答えており、具体的な感想として、「一人ひとり障害の状態が異なることを実際に理解できたこと」、「車椅子や入浴等の介助の方法が学べたこと」、「コミュニケーションが深まったこと」などを挙げており、子どもたちとつきあう時間が長くなるほど、よりレベルの高い経験ができたことが感じられた。

おわりに

介護等体験はまだ始まったばかりであり、その真価が問われるのは、体験した学生諸君が実際に教師となり、子ども達の教育を担当するまで待たねばならない。しかし、上記のような感想を聞く限りでは、介護等体験という、やや義務的な出会いの場であっても、心のバリアを取り除くことに少しは役立っているようである。

そして、彼らの教え子が教師を目指す頃には、バリアフリーという言葉が死語になるほど、ノーマライゼーションが実現し、介護等体験の必要性も無くなって欲しいものである。

(まつばらゆたか 附属桐が丘養護学校)